

坂口安吾

勉強記



勉
強
記

大震災だいしんさいから三年過ぎた年の話である。昨今りゆうせい隆盛を極めて、いるアパートメントの走りがそろそろ現れた頃ころで、また青年子女が「資本論」という魔法使いの本に憑つかれた。だした頃でもあった。生活の形式にも内容にも大きな転換期が訪れようとしていた。「近代」が、また「今日」が、始まるうとしていたのである。

涅槃ねはん大学校という誰でも無試験で入学できる学校の印イン度ド哲学科というところへ、栗栖くりす按吉あんきちという極度に漠然た

る構えの生徒が、あたかも忍び込む煙のような朦朧さで這入ってきた。強度の近眼鏡をかけて、落付き払った顔付をして、何かしら考えている顔付に見えたが、総体に、このような「常に考えている」顔付ほど、この節はやらないものはない。当節の伶俐な人は、こういう顔付をしないのである。尾籠な話で恐縮だが、人間が例の最も小さな部屋——豊臣秀吉でもあの部屋だけはそう大きくは拵げなかつたということだ——で、何かしら魔法的な力によつてどうしても冥想に沈まなければならぬというような驚くべき心理状態に襲われてしまふあの空々

漠々^{ばくばく}たる時間のあいだ、さすがに伶俐な人間も万策つき
てこんな顔付になることがあるという話であるが、あの
部屋に限って二人の人が同時に存在することが決してな
いという仕組みになっているものだから、まったくの話
が、あんな勿体^{もったい}ぶった顔付を臆面^{おくめん}もなく人前へ暴^{さら}すのは
不名誉至極な話である。だから当今「常に考えている」
顔付をあくまで見たいという人は、精神病院へ行くより
ほかに仕方がない。あすこの鉄格子^{てつごうし}のあちら側にはすな
わち必要以上に考え深い人達が、その考え深いという性
質や容貌を認められて、幸福な保護を受けているわけな

のである。

しかし、たまたま時世が時世であったから、人々は栗栖按吉の考え深い顔付を見ると、さては、という必要以上にな大きな空気をごくりと呑んで、つまりこういう顔付が刑務所の鉄格子のあちら側にある顔だと思いきんでしまふのだった。すなわち、これが「主義者づら」だと思つたのである。

あいにくなことに、この男には育ちの浅いところがあつり、というのとは、つまり諸々の人間はすでに数万年前にゴリラとかチンパンジーというものから人間になつて

しまったたというのに、この先生の祖先だけはようやく二
三百年ぐらい前にコンゴのジャングルからやおら現れ
てきたばかりだという面影があつた。諸君も御承知であ
ろうけれども、ゴリラとか獅子とか墓がまとか、みんな考え
深い顔付をしている。あの顔付は危険だ。動物園の鉄格
子の外側へ野放しにして、所もあろうに涅槃大学の印度
哲学科でもうひと苦労考える苦労を重ねるといふ、思い
余つたあげくには突然爆裂弾ばくれつだんを投げつけたりピストルを
乱射したり、それはもうみんなこの顔付のてあいなので
ある。穏良おんりような坊主の子弟のことだからこの怪物の入学

には一方ならず怯おびえた形で、だから少しぐらい神経衰弱いまさらになつても試験のある学校へ行くべきであつたと今更嘆いてみたのであつたが、栗栖按吉に話しかけられることがあると、気の毒なほどひやりと顔色を変えるのであつた。が、幸いにして、読者ももとより御承知の通り、墓やゴリラはめつたに人に話しかけない

栗栖按吉という男が、この時まで、どこで何をしていたかということになると、これが皆目かいもく分らない。筆者も色々調べてみたが、どうも、さっぱり分らない。このとき二十一歳だったが、それでも誰だつたかの話によると、

その前年のことであるが、大菩薩峠にほど近い奥多摩山おくたま中の掘立小屋、これは伴ばん某んなという往年の夢想児むそうじが奥多摩の高原を牧場に峠から谷底まで牛でうようよさせるつもりで建てた小屋だということだが、牛なんか、まことにもって胸がすくほど、一匹もないじゃないか。ところがこの掘立小屋を借り受けて、霧を吸い木の芽をくい、弓でもってモモンガーを退治してすき焼をつくり、人間は一カ月五円でもって楽々と生活ができるものだと悟りをひらき、もったいぶった顔付をして深山を散策したり本を読んだりしていた男が、どうもこの男じゃなか

ったかという話がある。この小屋には灯火がないから、日が暮くれると、突然ねてしまうほかに手が無いのだ。と、ここにこの男は容易ならぬことを発見した。というのは、この男が眠っている顔の真上に当る棟木むなぎに、每晚一匹の蛇がまきついているのを発見したわけである。昼になるともう姿がないところを見ると、蛇のねどこに相違ないが、蛇だってまき加減の具合や何かで悪夢を見るかもしれないからアツというまに足や腹をすべらして墜落したら、いやこれはもう目も当てられない。この男が悟りをひらいていない証拠には、暗闇の部屋の片隅で、真剣な

懊惱おうのうの様子といったらないのである。数日後には風にまぎれて山から姿が消えてしまった。それから涅槃大学へ現れるまで、とんと見た人がなかったのである。

涅槃大学の印度哲学科には十三人の生徒がいた。栗栖按吉という場違い者を除いてみると、あとはみんな素性の正しい坊主であった。

坊主の子供が大学へはいる。一番先に何をする。一番先に毛を延のぼすのだ。必要以上にポマードをたっぷりつけて、ああ畜生ちくしやうめなんだって帽子などという意味のはつきりしないものがあるのだらうと考えるのだ。と、容易な

らぬ事件が起きた。突然栗栖按吉がクリクリ坊主になって登校したのである。これはもう革命を愛する精神だ。十二人の同級生は悲憤ひぶんの涙を流したのだった。

まったく、なさけなくなるのである。栗栖按吉は小学校の一年生と同じように大きな帽子をかぶっている。帽子の中には新聞紙が三日分も折りこんであるのである。按吉は教室へ這入はいってくると、やがて大きな帽子をぬぎ、ハンケチを持たないから、ポケットから鼻紙をだして、クリクリ坊主をふくのであった。

もつとも栗栖按吉がクリクリ坊主になったのは革命を

愛する精神のせいではなかった。彼なみに、やむべからざる理由があつたためなのである。頃はすでに初夏だつた。長い頭髪がなかつたら、きつと涼しいに相違ない。ある朝按吉はふと考えた。その上彼は当時神経衰弱の気味があつて、頭に靄もやがかかつていて、どうもはつきりしてくれない。人間はゴリラやライオンに比べれば確かに頭脳優秀であるが、ゴリラやライオンが床屋とこやへ行くということを誰もきいた人がない。だから頭髪は刈るべきである。いな、剃そるべきであるのである。するともうきつと頭が良くなるのだ。——床屋の親父おやじは迷惑した。剃刀かみそり

のいたむこととといったらものの三日も研とがなければなら
ないだろう。そこで彼はこう言った。

「ねえ旦那だんな。頭に傷がつくかもしれないね。なにぶん頭
というものは、唐茄子とうなすぐらいでこぼこのものでがすよ。
へッへッへ」

「ある程度まで我慢します」と、按吉は冷静に答えたの
だった。頭には頭蓋骨というものがある。頭を剃るとい
うこととハンマーで殴ることとは違うから、脳味噌に傷
のできる憂うれいはない。それを充分心得ている顔付だった。
フレンド軒けんは横を向いて息をのんだ。この唐変木とうへんぼくめ、御

好み通り傷の十は進上してお帰しするから覚えていると心に決めてしまったのだった。

ところで栗栖按吉はここに奇怪きかいな発見をして度を失った。というのは、毛髪を失った頭の熱いことと云ったら、これを一体誰が信じてくれるだろう。普通汗をかくというが、クリクリ坊主の頭からは汗が湧出わきだし流れるのである。目へ流れこみ、鼻孔をふさぎ、口へ落ち、耳にたまり、遠慮会釈もなく背中へ胸へ流入する。これはもう頭自体が水甕みずがめにほかならないと信じるようになるのであった。

人体において最も発汗する場所はどこか？ 頭！ 毛

髪はなんのために存在するか？ 汗をふせぐためであ

る！ ああ。医学博士でも生理学者でも、ここまで知っている筈はない。なぜなら彼等には毛髪があるから。

——まったくもって栗栖按吉の思考にうっかりこだわっている、私まで愚かな奴だおろと思われてしまう。私は急いで話をすすめなければならぬ。

無意味な先生は誰かと云いえば、先生よりも物識ものしりの生徒の先生と、涅槃大学の印度哲学科の先生であった。ここの生徒は耳と耳の間が風を通す洞穴ほらあなになっ

風と一緒に先生の言葉も通過させてしまう。しかし先生はそんなことを気につけない。先生は喋るために月給をもらっているが、教えるために月給をもらっていないからであった。

こんなにあっさりしたクラスに、先生の言葉を真剣にきいている生徒がいたらどうだろう。実際笑止で、気の毒なほど惨めなものだ。耳と耳の中間の風洞に壁を立て、先生の言葉をくいとめようと必死にもがいているのである。なんのためだか、てんで意味が分らない。一目見て、これはもう助からないほど頭の悪い奴だという印象を受

けてしまうのである。第一こいつは何のために学校へ来て
ているのだろう。あまりのことに——いや、まったくだ。
物質の貧困よりも、このような精神の貧困ほど陰惨いんさんで、
みじめきわまるものはない。そこで先生は泣きだしたい
ほどがっかりして、学生の本分とは何か、とか、学校の
精神は何か、もっと正々堂々たれ、惨みじめであるな、高邁こうまい
なる精神をもて、そんなことを口走りたくなるのであつ
た。

すなわち栗栖按吉がこのようなたった一人の惨みじめな生
徒であつたのである。

もつともこんな男でも、たったひとつ効能のあることが分つてきた。というのは、涅槃大学の印度哲学科というところは、時々先生がわざわざ三十分も遅れたあげく教室へ出向いてくるのに、生徒の影がひとつもないということがあるのであった。すなわち坊主の子供達は就職の心配がないのであるし、世襲せしゅうの職業に情熱や興味を持っていないからなのである。時間制の月給をいただいているらっしやる先生達は、人のいない教室に四五十分もうたたねしたり鼻唄はなうたうたったりしなから風をひいたりするのであった。そこで教務課長というような人が級長

を呼び寄せて言うのである。君達の立場は分るのであるが、など同情深く口籠くちごもったりしながら、籤くじ引きで受持ちの講義を決めるのはどういものだね。つまりおのおの講座には必ず一人の学生が決死かくごの覚悟で出席する。いや、すなわち君、これは学生の義務というものじゃからね、などと言わたい渡すのだった。と、栗栖按吉のクラスでは、まさにその心配がないではないか。

ここに坊主の子供達が御布施おふせをくれたって俺おれはでないねという講座が二つあるのである。梵語ぼんごと巴利語パリーごの講座であった。ところが栗栖按吉が何より情熱かたむ傾けてこの

講座へせっせと通う。調べてみると、一日に七八時間も文法書をひっくりかえしたり辞書をめくっているという話なのである。梵語の先生は大変心のやさしい方であつた。新学期の第一日新入生を大変やさしくにこにこ見渡して（この時だけは一同出席していた）梵語というものは何年おやりになっても決してうだつの上らないものでございます、とおっしゃるのである。四五年前大変熱心に勉強なすったお方がありまして、今もって私のところへここはどうだ、これは何だ、とおききにいらっしやいます。この方は日がな一日梵語の勉強をなすっていらつ

しやる、ところが梵語は辞書をひけるまでがまず一苦勞、なかなか探す単語がおいそれと辞書から顔を出しません。いやはや梵語学者と申しましても、みんなそれぞれ怪しいものでございます、とおっしゃるのである。だからもう決して無理に梵語の勉強をおすすめは致いたしませんと、大變やさしく親切に言葉をつくしておっしゃるのだった。これでも梵語に出席しようという奴は、馬鹿でなければ礼節を知らない無頼漢ぶらいかんのひとりであるに相違ない。

けれども先生はやさしい心のお方だから、二学期にな

ったというのに、まだひとり生徒が出席していても、決してお怒りいかにならないのだった。いつもやさしく、にこにこ講義をつづけて下さるのだが、幾分薄気味いくぶんうすきわるくお思になるのである、というのは、この男が思い余った顔付をして質問したりするからで、この男が首をあげて今にも物を言いそうになると、先生は吃驚びつくりなすって目をおそらしになるのであった。

梵語とか巴利語はなるほど大変難物だ。仏蘭西語フランスは動詞が九十幾いくつにも変化するということだが、そんなもの梵語の方では朝めし前の茶漬ちやづけにもならないという話な

のである。それというのが後年栗栖按吉が仏蘭西語の勉強をはじめたからで、このような鈍物どんぶつでも、梵語の方で悩なやんできたあとというものは恐おそろしい。九十幾つの変化なんていやはや、どうも、やさしくて仕方がないのだ。覚えまいと思っけていても覚えるほかに手がないう始末である。だから栗栖按吉は仏蘭西語を勉強しようという人に、こういう風に言うのであつた。キ、君々々。ボ、梵語を一年も勉強してから仏蘭西語としゃれてみる。あんなもの、朝めし前の茶漬けだぜ。え、おい、君。

梵語の方では名詞でも形容詞でも勝手気儘に変化する

る。ひとつひとつが自分勝手と言いたいほど不規則を極めている。だから辞書がひけないのである。

按吉はどこでどうして手に入れたかイギリス製の六十
五円もする梵語辞典を持っていた。日本製の梵語辞典と
いうものはないのである。これを十分も膝の上でめくつ
ていると、しつかんせつ膝関節がめきめきし、かた肩が凝こって息がつまっ
てくるのであった。これを五時間ものせている。目がく
らむ。スポーツだ。探す単語はひとつも現れてくれない
けれども、全身快く疲労ひろうして、大変勉強したという気持
になっってしまうのである。単語なんか覚えるよりも、も

つと実質的な勉強をした気持になる。肉体がそもそも辞書に化したかのような、そうだい 壮大無類な気持になってしまうのである。

按吉の机の上にはこれも苦勞して手に入れた「ラーヂヤ・ヨーガ」という梵書とその英訳が置かれている。もう半年も第一ページ頁をにら睨んでいて、その五行目へ進むことができないのだった。

先生はやさしい心のお方だから、時々按吉をいたわって下さるのである。

「いまに原書が読めるようにおなりでしょう」先生はに

ここにことおっしやるのだった。「もうひと苦勞でござい
ます」

しかし按吉にしてみると、六時間も七時間も辞書をめ
くったあげくの果てに、ようやくたったひとつの単語を
突つきとめて凱歌がいかをあげるほどだったから、この先二苦勞
や七苦勞で原書がお読めになるところまで行けないこと
を知っていた。そこで按吉の釈然とせぬ顔付を見ると、
先生は更さらにいたわって下さるのである。

「いえいえ。梵語はもうそれでよろしいのでございま
す」先生はにこにこおっしやるのだった。「皆みなさんも

う同じことでもございます。五年十年おやりになっても、皆が皆まで引いた単語が現れてくれるというわけにはなかなか参るものではございませぬ」

これはまた心細い話である。これではなかなか釈然と笑うわけにはいかないのである。そこで先生はますます浮^うかない顔付の生徒を見て、ますますやさしく、いたわって下さる。

「梵語はあなた、まだまだ楽でございます」先生はにこにこおっしゃるのである。「チベット語とききたら、これはもう私はあなた、もう満五年間というもの山口恵海^{えかい}先

生に習っているのでございます。単語がもう何から何までひとつひとつが不規則変化。いまだに辞書がろくすっぽ引けは致しません。それでも帝大ていだいで講義致しております。大変つろうございます」

先生は帝大でチベット語の講師を務めていらっしやるのであった。先生がいつもにこにこしていらっしやるので、浮かないながら、按吉は次第に心気爽快そうかいになつていた。文法もよくお知りにならず、辞書もお引けにならなくとも、帝国大学で講義していらっしやるのである。チベット語や梵語というものは、辞書が引けず、読むこと

ができなくとも、ちやんとそれで読んでいる結果になつていのかも知れぬ。そうして栗栖按吉は辞書もろくに引けないうちに、ちやんと原書を読んでいる気持になつてしまふのだった。

そのころ、栗栖按吉は不思議な学者と近づきになつた。

この学者はゴール共和国のラテン大学校の卒業生で、言語学者であつた。東洋の二十数カ国語に通じているという話なのである。鞍馬六蔵くらまという大変雄大ゆうだいな姓名せいめいだったが、いかにも敏捷びんしやうな学者らしく、五尺に足らないお

方であつた。

鞍馬先生は追分おいわけの下宿を二室占領せんりようして数千卷しよせきの書籍と共にくすぶっていたが、朝になると、大概脱脂綿たいがいだつしめんにアルコールをしめして、丁寧ていねいに本を拭ふいていらつしやる。というのは、最近鞍馬先生に夢遊病しようこの症候が現れて、先生は夜中無意識のうちに歩行し、最も貴重な本箱に向つて放尿ほうにようし、またお眠りになる。そこで先生は毎朝目を覚して仰天ぎようてんし、アルコールで本をふく始末になるのであつたが、夢遊病はとにかくとして、貴重な書物に放尿するに至つては、どうにも悲痛なことである。要する

に夜中尿意に悩まなければいけないのであるから、先生は午後になるとお茶をのまず、その上部屋の四隅よすみへ溲瓶しゅびんを置いたが、無意識中における先生の意志はどうしても本に向って放尿せずには納まらない。生の馬肉やオツトセイの肉などを食い、遂に赤蛙あかがえるの生きた奴を食うところまで心をきめたが、どうしても食いたくないという意志などがあって、相反目せる精神がひとつの人体内においてまき起す争いの結果は乱暴だ。食べられたくない赤蛙よりも、これを食べようという先生の方が、より以上に慌あわただしく惨澹さんたんたる悪戦苦闘くとうをするのであった。

孤独こどくの先生は思うに弟子でしが欲しかったのだ。けれども
ペルシャ語だの安南語あんなんなどいうものは、先生の方が月謝
を払っても習ってくれる者がない。だからついに見出し
たたった一人の弟子、栗栖按吉をいたわってくれること
といたら涅槃大学の梵語の先生も及ばないという風
がある。

「その程度なら、君、語学を専攻するだけの天稟てんぴんがあ
る」と、先生は梵語の手並をためした上で、こんな思い
きったお世辞を言う。涅槃大学の梵語の先生と違って、
決して笑わないから、言葉がみんなほんのよような気が

するのだった。「ラテン大学の言語学科は全世界の天才が集ってくるが、中にはちようど君程の才能しかない男がいたのです。一年そこそこでその程度なら、日本では梵語学者になれるな」

先生の言葉はなんとなくあらゆる物に心安い感じを起させる。ラテン大学の天才だの安南の哲学者だのネパールの王様だのというものが友達のような気がするのである。日本の梵語学者なんてものは、どうも、俺おれの弟子に当る男じゃなかったかな、などという気持ちについてしまふのだった。

ところが先生は按吉に向って、大いに見込みがあるからチベット語を伝授しようと言う。二十世紀に仏教を勉強するほどの者なら、まずチベット語をやらなければ話にならない、とおっしやるのである。梵語や巴利語の文献ぶんけんはいくらも残存していないが、仏教関係の文献はほとんど全部チベット語に訳はされて伝わっている。だから仏教はチベットから這入はいらなければ二十世紀の学者として真物ほんものじゃないとおっしやるのだった。

あいにくなことに按吉はもはや印度哲学にそろそろ見切りをつけだしていた。とても悟りがひらけそうもない

からである。頭の毛もそろそろ生え揃そろってきたし、これを機会に印度の方と手を切つて、仏蘭西フランスとか独逸ドイツとか、ハイカラなところと手を握にぎろうなど考えだしていたのであつた。すでに印度界限かいわいにとんと情熱がもてないところへ、それが専門の帝大の先生でも、まだ文法もよくお知りにならず、辞書もお引けにならないとおっしゃる。なるほど辞書はひくために存在するのであるけれども、言葉は辞書をひくために存在するのではないようである。梵語やチベット語の辞書をひくのは健康によろしく食欲を増進させ概がいしてラジオ体操ほどの効果があるとはい

ものの、辞書は体育器具として発売されたものではない。そこで栗栖按吉は大汗かいてチベット語の伝授を辞退すること^{つと}に勉めたが、鞍馬先生という方は他人にも意志だの好き嫌^{きらい}いだのというものがあることなど、とんと御存じないのである。

「いや、君々」と先生はおっしゃる。「チベット語は仏教のために存在する言語ではないです。君、興味のない印度哲学は即座^{そくざ}に止^よすべきところだね。そしてチベット学者になりたまえ。元来チベット語の話せる人は日本に四五人いるいないの程度だぜ。すなわち君は六人目だな。

一カ国語に通じることはその国土と国民を征服せいふくしたことになるんだぜ。そうだろう。君」

どうも先生の話はうますぎる。おだてには至って乗り易やすい按吉だったが、言葉を征服すれば国土と国民を征服したことになるという、女の人に道を尋たずねて女の人返事をしてくれれば、女の人をわが物にしたことになるというのと同じようなものじゃないか。もつとも按吉が六人目のチベット学者になりかねないのは正真正銘しょうめいのところらしく、すなわち帝国大学の先生が文法もよくお知りにならず、辞書もおひけにならないことでも大概察し

がつくのであった。

ちようどそのころチベット語の大家山口恵海先生の所説で、古来から高麗人こうらいと称よびならわしていた帰化人たちがチベット人ではないかという発表があった。現に高麗の言葉というウズマサだのサイタマだのという地名がチベット語であるし、カグラ、サイバラがチベット語で、あの文章のヤというかけ声のようなものが卑猥ひわいな意味をもったチベット語だというのである。サンバソウがチベット語で「トウトウタラリ」の全文がそっくりチベット語にほかならず、現にチベットにおいては、これとほぼ

同じような踊りおどが行われていると言っているのであった。

この程度にわが国の古い文化に密接な関係があつてみると、鞍馬先生のうますぎるおだてに乗るのは危険だと思いつながら、つい六人目の学者になるのも満更まんざらではなさそうだという大きな気持になるのであった。

さあ按吉がチベット語の伝授を受ける快諾かいだくをすると、先生の勇み立つこと、それ教科書だ、辞書だ、文法書だ、参考書だ、チベットの事情に関する紹介書だ、これもやる、あれもやると按吉の膝ひざの上へ積み重ねてくれる。と、按吉がこれをひそかに注意を怠おこたらずにいたところが

——というのは、これが相当問題が臭いからで——先生
がこれらの書物を忙しく取り出してくる場所が、決して
本箱の腰こしから上に当る場所ではないではないか。してみ
ればこれはもう洗礼を受けたあれである。けれども学問
の精神は遥はるか高遠なところにあるべきだから、按吉は膝
の上の書物がたしかに湿しめっていても、これは神秘的な書物
だから汗をかいているのだなと考える。印度では糞便ふんべんの
始末を指先でするほどだから言語も多少は臭いなど自ら
言いきかすのであった。

ところが、不思議な因縁いんねんで、チベット語はたしかに臭

いのであった。というのは、先生は大変放屁ほうひをなさる癖くせがあった。伝授とちゆうの途中に「失礼」とおっしやって、廊下ろうかへ出ていらっしやる。戸をびしやりと閉じておしまいになるから、廊下でどのような姿勢をなすっていらっしやるかは分らないが、大変音の良い円々とした感じのものを矢つぎばやに七つ八つお洩もらしになる。夜更よふけでも陰気な雨の日でも、先生のこの音だけはいつも円々としていて、決して濡ぬれた感じや掠かすれた響ひびきをたてることがないのであった。それから廊下をなんとなく五六ぺん往復なすっていらっしやるのは充分臭気しゆうきの消え失せるまで

姿を見せまいという礼節と思いやりの心から出た散策であらう。やがて部屋へ現れて、また「失礼」とおっしやうて伝授をおつづけになる。

ここで筆者は日本帝国の国威こくゐのために一言弁じなければならぬが、帝国大学の先生が辞書がおひけにならないくともそれは日本帝国の不名誉ふめいよにはならないという事である。なぜならば、ラテン大学校の秀才も、やっぱり辞書がおひけにならないからであつた。先生は親切な方だから、生徒の代りに御自分で辞書をひいて下さる。按吉の面前でももの二三十分も激しい運動をなすつていらつ

しやるが、なかなか単語が現れてくれないのである。そのうち失礼とおっしやつて廊下へ出ていらっしやる。屁へをたれて、なんとなく廊下を五六ぺん往復なすつて、また失礼とおっしやつて、辞書を抱かえて激しい運動をなさる。やっぱり単語が現れない。

そのうち按吉はチベット語の辞典といえは学者の健康のために作られたものではないかという風に考えていて、一分や二分で単語を探しだしてしまうのはチベット語本来の性質にそむくものだという風に思っていたから、先生の激しい運動に対しても決して先生がお出来に

ならないせいだななどと思うことはなかつたが、しかし先生が失礼とおっしゃって廊下へ出ていらつしやる。なんとなく廊下を五六ぺん往復なすつて、また失礼とおっしゃって戻っていらつしやる。その先生の礼節がしみじみといったわしく、大變佻わびしくてならないのだった。そこで按吉はある日言った。

「先生、放屁は僕ぼくに遠慮えんりょなさることは御無用に願います。かえつて僕がつらいですから」

すると先生はその次放屁にお立ちのとき障子しょうじを開けようとして手をかけてから按吉の言葉を思い出されたの

であろう、それではとおっしやって振向いて、障子に尻を向けておいていつもの通り七ツ八ツお洩らしになった。そうして、その後はこの方法が習慣になったのである。ところがここに意外なことに、按吉は従来の定説を一気にくつがえす発見をした。これに就いては物識りの風来山人ふうらいさんじんまで知ったか振りの断定を下しているほどであるが、大きな円々と響く屁は臭くないという古来の定説があるのである。ところが先生の屁ときたら、音は朗々たるものではあるが、スカンクも悶絶もんぜつするほど臭いのである。すなわち先生がなんとなく廊下を往復なすっつてい

らっしやったのは、けだし自ら充分に御存じのところであつたのだろう。学問の精神は高邁こうまいなものであるけれども、ここにおいて按吉は、チベット語の臭気について悲痛な認識をもたなければならなかった。その頃の按吉の日記の中の文章である。

外は晴れたる日なりき

今日もまたチベット語を吸いて歸れり

この二行詩はいくらか厭世えんせい的である。先生の放屁へんぺいにあてられて、彼はとうとう思わぬ厭世感にかりたてられていたらしい。按吉はこの二行詩が出来上るまで詩という

ものを作ったことがなかったのである。ところが彼はこの時にわかにかこの世には散文によつては表明しきれない何物かが在ることを痛切に知つたのである。すなわちチベット語と屁のまじわ交るところの結果のごとき、これは散文の能力によつてはいかんとも表明することが不可能ではないか。こうして彼は意外にもチベット語と屁の交るところの結果から詩の精神を知り、また厭世のしんえん深淵をのぞいた。人間は、どこで、何事を学びとるかまことに予測のつかないものだ。

この伝授がもう一年間もつづいたら按吉は厭世自殺をしなければならぬような結果になったかもしれなかつた。ところが、ここに天祐神助あり、按吉は一命をひろったのである。

天祐神助は先生が童貞を失ったことに始まる。先生は花の巴里パリにおいてすら童貞を失わず、マレーの裸女らじよにも目を閉じて、堂々童貞を一貫し無事故国へ辿りたどついてきたのに、こともあろうにおよそ安直な売春婦を相手にして、三十数年の童貞をあっさり帳消しにした。

その結果、次のような理由によって、先生はまったく

厭世的になったのである。すなわち先生は按吉に言った。「なんだ君。交接というものは実にあっけないものじゃないか。快感なんか、どこにあるのだ。君、そうじゃないか。馬鹿ばかにしてやがる。僕は君、あの時だけは、世界中の言葉という言葉が総がかりになっても表現しきれない神秘的な感覚があるのだと思いきんでいたんだぜ。僕は君、一生だまされていたようなものだ。僕はもう、つくづく都会の生活がいやになったな。くにへ帰って、しばらくひとり考えてくる」

先生自体が神秘すぎて、按吉には、先生の厭世の筋道

や内容がどうもはつきり呑みこめなかつた。世界中の言葉という言葉が総がかりになつても表現しきれない神秘的な感覚というものをどうして三十何年も我慢がまんしていらつしやつたのか分らないし、その予想が外れたからといつてどうして故郷へ帰らなければならぬのかてんでわけが分らない。一生だまされていたなどと大変なことを言つて嘆なげいていらつしやるが、誰だれがどういふ風に騙だましていたのだから一向わけが分らない。先生がこんな大変なことを言つて嘆なげいているのをきいてみると、先生が言葉という言葉をみんな覚えようとしたのは、つまりそれを総が

かりにしても表現しきれないようなことを、実はどこかに表現されているのだと感違いしてせつせと勉強していたようにも思われるし、三十何年も童貞を守っていたくせに、実のところは先生年中あのことばかり考え耽^{ふけ}っていたようにも思われるし、これはもうてんでわけが分らないのだ。

とにかく分からないことばかりだが、按吉の身にしてみると、これですにかく、こっちの方は自殺がひとつ助かったという甚^{はなは}だ明朗な事柄^{ことがら}だけがしみじみ分ってきたのである。青天白日の思いであった。そうして先生が童

貞を失ってくれたことを天帝に向って深く感謝する思いによって心はしばらくふくらんでいた。先生の相手をつとめた売春婦にお礼を述べたいものだななどと、忘恩的なことを一向に平然として考えているほどであった。

もつとも先生が童貞を失ってくれたおかげで、名誉あるわが帝国にはひとりの奇怪なチベット博士が生れずに済んだという国民ひとしく祝盃しゆくはいを挙げなければならぬような隠れた功績かくもあるのであった。

その昔、泉州堺さかいの町に、表徳号を社楽齋しやらきさいという俳人

があつた。仙人せんじんになる秘薬の伝授を受け、半年もかかつて丸薬をねりあげて、朝晩これを飲んだあげく、もうそろそろ飛行の術ができるだろうというので、屋根の上から飛び降りて、腰骨こしぼねを折ってしまった。

この時以来、できないことをする、「シヤラクサイ」ことをする、というようになったという話である。

按吉は、時々深夜の物思いに、ふと、俺はどうも社楽まつえいの末裔まつえいじゃないかなどと考えて、心細さが身に沁しむようになつていた。若い身そらで、悟りさとをひらこうなどは、どう考えても思慮しりよある人間の思想じゃない。第一、

辞書だの書物の中に悟りが息を殺して隠れているという
 ことは金輪際こんりんざいないではないか。その昔、猿さるの大王だの豚ぶた
 の精だのひきつれて、こういう思想で、天竺てんじくへお経をと
 りにでかけた坊主もいたけれども、あそこには生死をか
 けた旅行があつた。按吉ときては、電車にゆられて学校
 へ行くだけではないか。

第一、印度の哲人達を見るがいい。若い身そらで、悟
 りをひらこうなどと一念発起した青道心あおどうしんはひとりもいな
 い。どれもこれも、手のつけられない大悪党ばかりであ
 る。言語道断な助平すけべいばかりで、まず不惑ふわくという年頃まで

は、女のほかの何事も考えるところがない。仏教第一の大哲学者は後宮へ忍びこんで千人の美女を犯す悲願をたて、あらかた悲願の果てたころに、ようやく殊勝な心を起した。これにつづく更に一人の大哲人は、母親を犯してのちに、ようやく一念発起した。おまけにこの先生ときては、天晴悟りをひらいて当代の大聖人と仰がれるようになってから、夢に天女と契りをむすんで、夢精した。これを弟子に発見されて有象無象にとりかこまれた詰問を受け、聖人でも夢と生理は致し方がないものとフロイド博士に殴られそうなことを言っつて澄してい

る。徹頭徹尾てつとうてつびあくどい聖人ばかりであるが、按吉は我身と社樂齋のつながりについてひそかに心細さが身に沁むたびに、このことについて、特にこだわらずにはいられなかった。社樂齋がいきなり仙人になることはまずもつて不可能だが、大悪党が聖人になることは確かに不可能ではないはずだ。

ところで、話は別であるが、印度の哲人とは違った意味で、日本の坊主が、実にまた、徹頭徹尾あくどいのである。

仏教の講座に出席する。先生方はみんな頭の涼すずしい方

で、なかには管長かんちようげい下かもあり、衣をつけて教室へでていらっしやる。一切かいくう皆空を身につけて、さすがに悠々ゆうゆう、天地のごとく自然の態ていに見受けられたが、淡々たんたんとして悟りきった哲理の解説にもかかわらず、悟りの明るさとか、希望とか、そういうものの爽快そうかいさを、どうしても感じることができなかつた。そうして、それを感じさせない障碍しょうがいは、哲理自体にあるのではなく、それを解説していらっしやる先生方の人柄——むしろ、肉体（実に按吉はその肉体のみはつきり感じた）にあるのだと確信するより仕方がなかつた。実に、暗い。なにかしら、荒涼こうりよう

として、人肉の市いちにさまようような切なさであった。不自然で、陰惨いんさんだった。

按吉は、時々、お天気の良い日、臍下丹田せいかたんでんに力をいれて、充分覚悟かくごをかためた上で、高僧を訪ねることが、稀まれにはあった。坊主は人の頭を遠慮なくぶん殴るという話で、三十棒といたりして、ひとつふたつと違うから、出発に際して、充分に覚悟をきめる必要などがあったのである。天日たぬにくらし、とはこの時のことで、良く晴れた日を選んで出ても、道中は実にくらく、せつなかった。けれどもさすがに高僧たちは、按吉のような書生

にも、大概たいがい気楽に会ってくれたし、会ってみれば、実に気軽にうちとけて、道中の不安などは雲散霧消むしようが常だった。そうして、おのおの高僧達は、おのおの悟りの法悦ほうえつをきかせてくれた。けれども、ここでも、やっぱり人肉の市をさまようような切なさだけは、教室の中と變りがなかった。

こういう立派な高僧方にお会いすると、どういわけだか、人間とか、心とか、そういうものを感じる前に、いきなり肉体を感じてしまう。この世には温顔という言葉があるが、その實際が知りたかったら、高僧にお会い

するのが第一である。すなわち、肉体は常に温顔をたたえ、さながら春の風、梅花ばいかさ咲くあのやわらかな春風をたたえていらつしやる。そうして、お別れしてしまいうまで、肉体の温顔が、ただ、目の前いっぱい立ちふさがっているのである。そうして、肉体の温顔が、ニコニコと、きさくに語って下さるのである。ナニ、美女もただの白骨でな、と、肉体の温顔がニコニコとおつしやる。また、あるときは、これを逆に、イヤ、ナニ、美女のやわらかい肉感というものは、あれもまたよろしいものじゃヨ、と、こうおつしやって大變無邪むじやき気にたのしそうにニコニ

コとお笑いになり、あれにふれるとホンマに長生きするのでのう、とおっしやるのである。

これと同じ意味のことは長屋の八さんが年中喋しゃべっているのであった。けれども、長屋の八さんはてんで悟りをひらかないから、八さんがこんなことを喋る時のだらしない目尻めじりといったらまことに言語道断である。実にだらしなく相好そうごうくずしてへッへッへとおでこを叩たたき、たちまち膝を組み直したりするけれども、八さんの話をきいていると、八さんの肉体などはてんで意識にのぼらない。こっちもたちまちニヤニヤして八さん以上に相好くずし

て坐すわりなおしてしまふのである。どうも悟りをひらかないてあいというものは仕方がない。夜の白むのも忘れて喋り、翌日は、酒ものまずに、ふつかよいにかかつている。

ところが高僧のお言葉ときては、そういう具合にいかないのである。こつちもたちまちニヤニヤして、てもなく同感してしまふという具合にいかない。お言葉と同時に、まず何よりも高僧の肉体が、肉体の温顔が、のっしのっしと按吉の頭の中へのりこんできて、脳のう味噌みそを搔かきわけてあぐらをかいてしまふのだ。按吉は、思わず目を掩おお

う気持になる。悟りのむらだつ毒氣に打たれた。時には瞬間しゅんかんりつぜん慄然とした。

そのころ栗栖按吉に、ひとりの親友ができていた。

竜海りゅうかいさんと云いって、素性の正しい坊主であつたが、ただ高僧ではなかつたから、瘦やせ衰おとろえた肉体をもち、高僧なみに至つてよく女について論じたけれども、てんで悟りに縁えんがないから、肉体の温顔などは微塵みじんもなかつた。

竜海さんは坊主の学校で坊主の勉強しなければならぬはずであつたけれども、坊主の足を洗いたいというこ

とばかり考えていて、金輪際坊主の講座へでてこなかった。そうして、絵描きになりたいのだと言っていた。あいにく、竜海さんは貧乏な山寺の子供で学資が甚だ乏しいから、生きて食うのもようやくで、とても油絵の道具が買えない。水彩やパステルなどでトランク一杯絵を書いていたが、呆れたことには、女の姿の絵ばかりである。按吉は竜海さんを見くびっていたわけではないが、坊主の絵だから南画のような山水ばかり想像して、とにかく風景が多いだろうと思っていた。そこで、按吉は驚いた。むしろ唸った。絵が名作のわけではない。何百枚

の絵を見終って、女以外の風景画が、花一輪すら、なかったからに外ならなかった。

「僕は、女のことしか、考えることができませんで……」

びっくりした按吉をみて、竜海さんは突然まっかな顔をして、うつむいて言った。竜海さんは素性の正しい坊主だから、どんな打ちとけた仲になっても、あなた、とか、あります、という丁寧な言葉を使った。

竜海さんは痩せ衰えて、風に吹かれて飛びそうな姿であっただが、およそ執拗頑固な決意を胸にかくしていたの

であつた。それは、油絵の道具をきつと買つてみせると
いう、小さいながらもおよそ金銭の決意であつた。そこ
で食事を一食八銭にきりつめ、そのためには非常に遠い
食堂へ行き、通学に四哩マイル歩き、そうして貯金を始めた
のである。いよいよ予定の額になつて、さて、油絵の道
具を買いに行こうという瞬間に、盲腸炎もうちようえんになつてしま
つた。入院し、実に貧弱な肉体ですなア、と医学博士に
折紙つけられた拳句の果に、貯金をみんな、なくしたの
である。

竜海さんは意気銷沈しょうちん、まったく前途をはかなんでい

たが、ある日、再び元気になった。というのは、フラン
ス帰りの放浪画家とふと知りあいになったからで、この
画家の話によると、巴里パリまで辿たどりつきさえすれば、あと
は一文の金がなくとも、なんとか内職で生きのびながら
絵の勉強ができるという耳よりな話なのである。これは
実際の経験談で、竜海さんを納得させる力があつた。

その日、ただちにその場から、忽然こっぜんとして、すでに竜
海さんは貯金の鬼おにであつた。一食八銭の食事も日に二度
にきりつめ、あるときは一食にへらし、フラフラしながら
ら学校へ来て、水をのみ、拾った金も遠慮なく貯金した。

「今日、五十銭、拾いました。すぐ、貯金して参りました」

竜海さんは必ず按吉に白状した。まっかになつて、うつむいて、白状した。竜海さんの気持としては、誰かに白状しなければならなかつたに相違ない。巡査じゆんさに白状するよりも、按吉に白状するのが便利であつたのである。う。拾つたとき早速郵便局へ駆けつけかける用意ではあるまいけれども、懐中かいちゆうに、年中貯金通帳を入れていた。

こうして不転の決意をもつて巴里密航の旅費を累積るいせきしはじめたのだが、同時に、たちまち、栄養不良の極に

達して、亡者にちかひ姿になった。按吉は不安であった。

今度は盲腸どころじやない。念願の金がたまつた瞬間に、
ゆうめいさかい 幽明境を異にして、こんぼく 魂魄だけが水ものまず齒ぎしりし
 て巴里へ走って行きそうな暗い予感がするのである。し
 かし竜海さんは落ちついていて、目的のためには、栄養
 不良もてんで眼中におかなかつた。

丁度そのころの話である。

竜海さんの先輩せんぱいに当る一人の坊主——年の頃は四十二
 三、すでに所属の宗派では著名な人で、管長の腰巾着こしぎんちやく
 をつとめており、何代目かの管長候補の一人ぐらいに目

されている坊主であつたが、これが何かの因縁いんねんで、ある日、按吉と竜海さんを引きつれて、浅草のとある料理屋で酒をのんだ。

坊主が般若湯ほんにやとうをのむというのは落語や小咄こぼなしに馴染なじみのこ
とだが、あれは大概山寺のお経もろくに知らないような
生臭坊主なまぐさで、何代目かの管長候補に目されている高僧は
さすがに違う。なかなかもって、八さん熊くまさんと同列に
落語の中の人物になるような頓馬とんまな飲み方はしないので
ある。

ここでも言いもらしてはならないことは、まず、第一

に、温顔であつた。この世に顔の数ある中で、温顔の中の温顔である。常に適度の微笑えみをふくみ、陽春なんぷうの軟風をみなぎらし、悠々ゆうゆうとして、自在である。声はあくまでやわらかく、酔よにまぎれて多少の高声を発するようなことすらもない。洒脱しやだつな応待で女中をからかい、竜海さんと按吉にさかんに飲ませて、自分は人につがれなければ強しいて飲むということがなかつた。

さて、ここをでて、何代目かの管長候補は二人の青道心をひきつれて、待合まちあいという門をくぐつた。

思うに何代目かの管長候補は、二人の青道心が、酔わ

ないうちから女を論じ、酔えばますます女を論じ、徹頭徹尾女を論じて悟らざることおびただしい浅間あさましさをあわれみ、惻隱そくいんの心を催もよおしたのに相違ない。高僧はどのように、また、どの程度に、女色をたのしむべきか、という具体的な教育を行うつもりであったのだ。

芸者が来た。みんな何代目かの管長候補の長年の馴染で、芝居しばいの話や、旅の話や、恋人の話や、およそお経の話以外はみんなした。

深夜になって、一同、待合の一室で雑魚寝ざごねした。朝がきた。顔を洗って、着物を着代えて、何代目かの管長候

補は女の襟えりを直してやったり、女の帯をしめてやったり、熟練の妙をあらわして、二人の青道心をしりえにどうじやく瞠若たらしめた。竜海さんも按吉も、何代目かの管長候補の厚意に対して感謝しないわけではなかった。それはたしかに純粹な厚意であつたに相違ない。愚昧ぐまいな二人の青道心を、いくらかでも悟りの方へ近づけてやろうという、しかも芸者買という最も誤解され易い手段を用いてあえて後輩を導くという、容易ならぬことである。——けれども釈然とはできなかつた。どうしても、なにかしら、割りきれない暗さが残つた。

「なにかしら、割りきれないと思いませんか」按吉は竜海さんに訊きいた。

「割りきれません！ いい加減です！ 鼻持ちならない！」

そう答えて、竜海さんは、怒いかりのためにぶるぶるふるえた。二人はすっかり沈しずみこんで、がっかりしながら暫くめあてなく歩いていった。

あれぐらいのことをするなら、なぜ堂々と女と一緒にねないのだ。そういうことがまず第一に考えられる。問

題は、しかし、決して、それではなかった。

たとえば堂々と女とねても決して坊主は明朗にならない。按吉は思った。なにか割りきれない不思議な毒気は、単に女とねるねないの問題だけのせいではない。もつと、根本的なものである。坊主たちは、女を性欲の対象として考えない。彼等が女から身をまもるのは、ただ、性欲をまもるだけの話である。

しかし、俗人は女に惚れるほ。命をかけて、女に惚れる。どんな愚かなことおろもやり、名誉めいよもすて、義理もすて、迷いに迷う。そのような激しい対象としての女性は、高僧

の女性の中にはないのである。按吉は痛感した。どちらが正しいか、それはすでに問題外だ。迷う心のあるうちは、迷いぬくより仕方がないと痛感した。そうして、こゝろがつかないのち、肉体の温顔だとか、むらだつ毒気だとか、そういうものを持たない人を見直すと、みんな今にも女のために迷いそうで、義理も命もすてそうな脆さもろがあるのに気がついた。

そんな一日。按吉は学校の門前で、一枚のピラをもらった。

トルコ語とアラビヤ語を一カ年半にわたって覚える。授業は毎日夜間二時間。そうして、一年半の後、メッカ、メジナへ巡礼にでかける。回教徒の志望者をつのるピラであった。

その日から、締切しめきりの最後の日まで、按吉は真剣に考えた。メッカ、メジナへ行きたくなくなってきたのである。

そのころ彼は、ちようどある回教徒の聖地巡礼の記録を読んだ直後であった。巡礼者の大群はアラビヤの砂漠さばくを横断して、聖地へ向って、我武者羅がむしやらな旅行をはじめる。信仰しんこうの激しさが、旅行の危険よりも強い。そこで、食料

の欠乏や、日射病や、疫病えきびようで、砂漠の上へバタバタ倒れる。その屍体したいをふみこえて、狂信の群がコーランを誦しやうしながら、ただ無茶苦茶に聖地をさして歩くのである。

思いきって、砂漠横断の群の一人に加わろうかと考えた。そこに、命があるような思いがした。なにかノスタルジイにちかい激烈げきれつな気持であったのである。締切の日、彼は思いきって、丸ビルへでかけて行った。そうして、講習会場の入口へ来て、再び決心がつきかねて、三度その前を往復した。トルコ人が、彼を見つめて、講習会場の扉とびらをあけて、消えてしまった。

だが、彼はとうとう這入はいらなかつた。トルコ人の姿が消えると、ふりむいて階段を降りた。その理由は——彼は丸ビルへくる電車の中で、すぐれて美しい女学生を見たのである。目のさめる美しさだった。彼の心は激しく動いた。

これでアラビヤへ行こうなどとは、大嘘おおうそだと思つたのである。そうして丸ビルの階段を降りながら、生れてはじめて本当のことをした感動で亢奮こうふんしていた。これから、いつも、こうしなければならぬ、と自分に言いきかせながら歩いていった。

その日から、彼は悟りをあきらめてしまった。竜海さんは巴里密航の直前に、女に迷って、行方不明ゆくえになってしまった。そうして、生死が、わからない。

（昭和十四年五月）

日本文学電子図書館

「坂口安吾 ちくま日本文学009」

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年9月25日 第2刷発行



日本文学電子図書館